

萩

Vol 12

ものがたり

山田顯義

— 法治国家への歩み —

秋山香乃

幕末維新の群像 (1)

山田顯義先生之像





戊辰戦争当時の山田顕義

発行所 氏寄贈

シリーズ
萩
ものがたり ⑫

幕末維新の群像 (1)

山田 顕義

— 法治国家への歩み —

秋山 香乃

目次

第一章 立志……………5

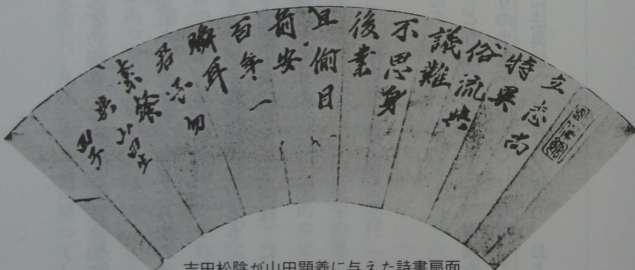
第二章 志士の時代……………13

第三章 幕府との対決……………21

第四章 条約改正に向けて……………31

第五章 法治国家への歩み……………53

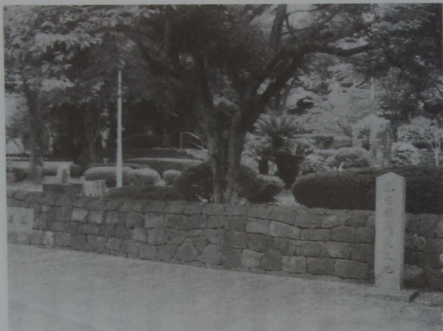
裏表紙 山田顕義最晩年の書「守真」（春風文庫蔵）



吉田松陰が山田顕義に与えた詩書扇面
（『山田顕義伝』より。本書9頁参照）



山田 顕義
(1844—92)



山田顕義誕生地（萩市椿東中ノ倉）

第一章 立志

■ 出来の悪い幼年期

弘化元（一八四四）年、萩の東方に位置する松本村（中ノ倉）に生まれた顕義、通称市之允（一九二）は出来の悪い少年だったようだ。幼年期の彼を伝えるエピソードの中で、顕義は父親に叱られてばかりいる。

例えば、庭の木によじ登ってほどよい枝に仁王立ちとなり、小便を飛ばしたまでは良かったが、放物線を描いたそれは母親を指して飛んでいき、凶らずも見事に命中して後でしこたま父親に殴られたことがあったらしい。

また、通っていた手習い塾の帰り、寄り道の遊びに熱中しすぎて刀を外したことを失念し、丸腰のまま家に戻ってしま

「性質遅鈍、垂鼻頑獸、ほとんど白痴の如し」

これは萩に生まれ、初代司法大臣を務めて我が国の近代法典のほとんどの編纂を手がけた『法典伯』山田顕義（日本大学学祖）の子供時代を表した言葉である。

今の若い人は知らないだろうが、昔の子供というものはたいてい洩垂れ小僧だから、鼻をたらすのはいとして、「ほとんど白痴の如し」とは穏やかでない表現だ。

おそらく極端に無口で、大人に話しかけられてもあまり反応のないタイプの子供だったのだろう。しかし、この「白痴の如」き少年は、のちに戊辰の役の箱館戦でわずか二十四歳（満換算・以下同様）にして新政府軍の陸海軍参謀として戦場に立ち、その水際だった用兵術と見事な戦略から、

「用兵の妙、神の如し」

「神算鬼謀の将」

などと称えられるようになるのである。

ところが、天才軍略家へと成長した顕義は、元來が変わり者であつたらしい。

「山田の才と野津の勇は明治の双壁」と言わしめた「戦術の泰斗」は、どうしたことかある日、軍服を脱ぎ、その手に法典を取って人々を驚かせた。彼は、日本の近代法に残りの半生を捧げつくしたのだ。これは「白痴の如し」洩垂れ小僧から「神の如」き軍人へと脱皮し、さらに法典伯へと転身した男の、およそ半世紀にわたる物語である。

ったことがある。こちらは武士の魂ともいえる刀のことだ、ついうっかりではすまされない。おそらく死ぬほど殴られたのではなからうか。

さらに相撲と水泳ばかりしていたせいで全身真っ黒に焼けていたという。もつとも親子三代で黒かったというから、こちらは地黒というのが真実だろう。

これが大組士百三石の家柄の子ではなく、また山田本家の嫡子でなければ微笑ましいばかりのエピソードだったに違いないが、父の七兵衛（一八三三―一八六九）にしてみれば息子の将来が少々不安だったろう。なにしろ山田家は、藩政改革を行って銀量八万五千貫という絶望的な藩の負債を黒字に転換させた村田清風（一七八三―一八五五）の一族に当たる。

顕義の伯父山田亦介（一八〇八―一八六四）は、萩の生んだ傑物吉田松陰（一八三〇―一八五九）の目を海の外へと向けさせた兵学者で、父の七兵衛にしても長崎海軍伝習所第一期伝習生として藩が選抜したエリートだ。平和時ならまだしも、一八四〇年には隣国清がアヘン戦争によって諸外国に租界を許し、その余波が日本をも飲み込もうとしている時期だ。海防の気運が高まる中、藩の砲術、造船術、軍艦の操法を担う立場にいる七兵衛の跡取りが、「垂鼻頑獣」で刀を置き忘れるようではいかにも困る。

七兵衛は、顕義を藩校明倫館の道場（柳生新陰流）へ通わせて武道に励ませる一方で、学問に関しては同じ松本村の私塾「松下村塾」へ任せることを決断した。

顕義十二歳。師吉田松陰との邂逅である。

■国家の大罪人に師事する

顕義が松下村塾の門を叩いたころ、師となる松陰は罪人であった。ほんの少し前までは実際に藩の野山獄に入れられていた男である。しかも犯した罪は国家レベルだ。下田沖に停泊していたアメリカ船に密航し、外国へ渡ろうとしたのである。鎖国政策を布いていた徳川の世にあつてこれは大罪に値する。そうと知って、なぜ松陰は渡海しようと試みたのであろうか。

それは、諸外国による日本国への侵略の危機を痛切に感じとっていたからに他ならない。嘉永元（一八五三）年にペリ率いるアメリカ軍艦がやってきて、鎖国政策を取る日本に開国を迫った。幕府は翌年、アメリカのちらつかせる近代的火力に屈する形で、日米和親条約を結んでしまった。この条約は、結んだ国を今後結ぶ他国と同等以上の条件で優遇しなければならぬ最惠国約款を含む不平等条約である。

このままでは日本が危ないと考えた松陰は、米欧諸国に対抗していく必要性を痛感し、そのためにまず己のしなければならぬことは異国を知ることだ、異国を知るには直に現地に飛び込んで検分するのが早いと信じ、即実行に移したというわけだ。

密航はあえなく失敗し、松陰はアメリカへ行く代わりに獄舎へ入った。だが、実父杉百合之助（一八〇四―一八六五）預かりの身となり、杉家の一室に移ってからは、松陰の気概を慕い、時代の変化を見過ごせない多くの若者たちが吸い寄せられるように集まり始めた。



顕義が学んだ松下村塾（萩市椿東・松陰神社）

高杉晋作（一八三九—一八六七）、久坂玄瑞（一八四〇—一八四四）、吉田稔磨（一八四一—一八四四）、入江杉藏（一八三七—一八四四）、野村靖（一八四二—一九〇九）、前原一誠（一八三四—一八七六）、伊藤博文（一八四二—一九〇九）、山縣有朋（一八三八—一九二二）、品川弥二郎（一八四三—一九〇〇）等。

後世に名を残したそうそうたる人材だ。それではこの逸材たちの中で顕義自身はいったいどんな生徒だったのだろうか。残念ながらそれを伝える逸話はほとんど残されていない。唯一語られる話の中で、顕義はこのときもやはり叱られている。いや、活を入れられたというべきか。よほど松陰の目にはほんやりして見えたのだろう。年始の挨拶をするために村塾を訪ねた顕義は、「国家の大事のこの時期に、のんびり年賀とはなにごとか」と松陰に突っぱねられ、びっくりして涙ぐみ、助講富永有隣（一八二二—一九〇〇）に謝って取り成して欲しいと訴えたということだ。

こんな顕義も学問の方はできたらしく、明治二十年に

国木田独歩（一八七二—一九〇八）のインタビューに答えた有隣が、「市イ（顕義）は中々読む子であった」と証言している。

■松陰からの贈りもの

顕義は塾生の中で最年少グループだったことも手伝って、松下村塾時代あまりパツとしなかった。そんな少年顕義に、ある日、松陰は自作の漢詩を記した扇を送る。

立志尚特異（立志は特異をとうとぶ）

俗流興儀難（俗流はともに議し難し）

不顧身後業（身後の業を顧わず）

且偷目前安（かつ目前の安きをぬすむ）

百年一瞬耳（百年一瞬のみ）

君子勿素餐（君子粗餐するなかれ）

一読して赦しい詩である。松陰は顕義に志を立てることの大切さを教え、その志は平凡であつてはなら

ないと論じ、目先の利益に惑わされて事を見誤ることなく、未来をも見通す広い視野を持つよう望んだ。この詩は一説に顕義の元服祝いとして松陰が認めたものだとも言われているが、ひとりの人間のその後生き方を決定付けるほどの衝撃を、当時十二歳の少年に与える力を持っていた。顕義は、「いたずらに禄を盗む人になることなく、見返りを求めず、自身のなすべきことを実行せよ」と指し示す松陰の教え通り、死ぬまで自分の偉業をなんら誇らず、権力に追従せず、批判にも耐え、時には生死さえも度外視し、自身のなすべきことだと信じた仕事に、こつこつと全力で打ち込み続けた。

顕義が扇を貰った同じ年の六月、松下村塾にとって一つの転機が訪れた。大老井伊直弼（二八一五—一六〇）が、勅許を得ぬままアメリカと日米修好通商条約を締結させたのだ。

これは日本側に関税自主権がなく、諸外国側に領事裁判権を与えるという前回以上に際立って不平等な条約だ。ことに関税自主権が認められなければ、国際社会上では真の独立国家と言いがたい。もはや属国への第一歩へ、日本国が足を踏み入れたといっても過言ではないのである。

松陰は国に不利益をもたらす条約を、列強の言うがまま結ばされた幕府の不甲斐ないまでの無能ぶりに憤りを募らせ、「国患を思わず国辱を顧みず、天勅を奉じない者は天下の賊である。征夷の罪を我らは決して許してはならない。今こそ大義に準じて、討滅誅戮せよ」と激しい言葉で弾劾した。

これ以上、外交手腕のない幕府に国を任せておけば、日本もいずれは清国のように侵略されてしまうだろう。松陰は、ぴりぴりと危機感に煽られ、倒幕を意識するようになっていくのである。

その過激な思想はやがて幕府の知るところとなり、松陰は捕らえられて世に言う安政の大獄に巻き込まれる形で刑場の霧と消えた。

■立志—師の志を継ぐ

最愛の師を幕府にもぎ取られるように殺された顕義ら門下生たちは、哀しみの底でなお勝を突いたりしなかった。松陰が死に直面した獄中で、門弟たちへの遺言とも言える『留魂録』を綴り残して逝ったからだ。

「義卿三十、四時已に備わる、亦秀で亦実る、其の秕（未熟の穀物）たるも其の粟たるも吾が知る所に非ず。若し同志の士その微衷を憐み継紹（あとを継ぐ）の人あらば、乃ち後来の種子未だ絶えず」

君たちがいるから僕は安心して逝こうという師の、門弟たちを真っ直ぐに信じた最期の言葉を前に、志を継がずにいられるだろうか。

日本を諸外国の侵略から守り、さらには師の仇を討ちたい。そのために具体的になにをすればよいか、実際はまったくわからない状態ではあったが、とにかく門弟たちは行動を起こさねばならないと考えた。生前、『実践』を重んじた師の信頼に、立志と実践で応えていこうと決意したのだ。

松門の双壁のひとりである久坂玄瑞は、虎視眈々と日本を狙う諸外国と対抗していくためには、弱腰外

第二章 志士の時代

■攘夷決行とクーデター

文久三（一八六三）年五月十日未明。長州藩は日本中でただ一藩、藩ぐるみで攘夷を決行した。関門海峡に投锚したアメリカ商船に向けて発砲したのだ。

このとき顕義は、勤皇派公卿中山忠光（一八四五―一六四）党首、久坂玄瑞率いる光明寺党に所属し、伯父亦介がプロジェクトを始動させて造った長州初の鉄製洋式軍艦「庚申丸」に乗り込み、世界に向かって『発砲』という形で宣戦布告を叩きつけた。顕義、十八歳の夏である。

長州はこの後、二十三日にはフランス船、二十六日にもオランダ船を攻撃し、いっそう調子付く。しかし長州の軍備など、実際は米欧諸国と比べて技術面でも規模においても蟻と象ほどの違いがある。六月一日から数度にわたって報復に出た諸外国連合軍の反撃を受け、長州保有の軍艦は三艦ともあえなく戦闘不能、下関の市街地の一部は焦土となってしまった。

この攘夷戦の失敗で焦りを感じた玄瑞らは、京で他藩出身の尊攘派の志士らと合流し、強硬手段に出る

交で遠謀もなくその場限りの政策しか打ち出せない幕府を倒し、天皇の下に国家を統一することこそが急務と考えた。王政復古を目指したのだ。

もう一人の高杉晋作は、割拠によって長州藩を徳川支配下から独立させ、日本国において強い主導権を獲得することで直に外交を行う道を模索した。

門下生たちのほとんどは、二人の目指す未来の違いに気付かぬまま、積極的に、あるいは半ば巻き込まれるように渦中へ飛び込んで行った。顕義も例外ではない。砲術を学ぶ傍ら、有志を募って狙撃隊を編成し、近代戦法の研究に明け暮れながら、倒幕と攘夷の機会を狙っていた。

■暗殺未遂と脱藩

長州のほとんどのものが長門の国へ戻ったが、顕義や玄瑞、松陰の盟友木戸孝允（桂小五郎一八三三—七七）らはなお京へ留まった。入京差し止めを命じられた長州人が京にいとわかれば処罰の対象となるが、それでも誰かが残って中央の政局を国許へ伝えなければならぬ。その危険な仕事を請け負ったのだ。顕義は長州藩御用達商大黒屋今井太郎右衛門の協力で商家の丁稚を装い、新割りや風呂焚きをする傍ら、幕府や会津、薩摩の動き、あるいは新撰組や他藩の様子に気を配った。それも束の間、国許でも政変が起こり、長州を危機に陥れた者たちへの弾劾の兆しが見え始める。玄瑞や孝允らは国許の対応に追われ、帰国を余儀なくされたため、顕義ひとり晩秋の京に残ることとなった。

このとき一つの逸話を残した。今度の八・一八の政変は容保の側近、会津の秋月悋次郎（一八二四—一九〇〇）が中心となつて成功させたものだと言つた顕義は、悋次郎暗殺を謀つたのである。

それは月の薄い、暗い夜のことだ。抜刀した顕義は、二条城から会津の黒谷本陣へと戻る悋次郎の駕籠を、「その駕籠、待て」と呼び止めた。声に応じて駕籠がびたりと止まり、駕籠かきどもは無言で無双流の構えを取った。彼らはボディガードもかねていたのだ。相当の遣い手であるのは、構えだけでなく呼吸からも見てとれる。顕義は容易に仕掛けることができず、双方は互いに睨み合った。そうするうちに悋



若き日の顕義像（右、秋市松陰記念館）

ことを決意した。朝廷工作により大和行幸の勅を戴き、その護衛の軍を途中から倒幕の義軍に換え、一路箱根を目指すとしようもの。箱根の先には徳川の拠点、江戸がある。幕府を倒して帝主導の親征攘夷を行おうとしたのである。

これだけでも無謀な話であつたが、切羽詰つていた彼らは、行幸の最中に京師へ火をかけることを考えた。帰る場所を奪つて帝の決意を促し、錦旗を出させるつもりだ。狂気じみた計画だが、顕義は門下生として玄瑞に従っている。彼らの胸の内にあるのは、二百数十年間動いたことのない日本を動かすには、時に狂人にならねばならないとの悲壮なまでの覚悟だったかもしれない。

しかし、彼らの計画は京都守護職会津藩主松平容保（一八三八—一九三）の知れるところとなつてしまつた。この暴挙を阻止するために、会津は急きよ薩摩と同盟を結び、八月十八日の朝、御所の門を全て閉ざして長州派の公卿を締め出すというクーデターを敢行した。世に言う八・一八の政変である。賊の汚名を被り、京を追われた長州は、完全に敗北、失脚したのだ。

次郎当人が駕籠を降り立ったではないか。あつと思つたときには、手裏剣が顕義目掛けて飛来した。それを間一髪、左方へ飛んでかわし、顕義は闇の中へ姿を消したという。

後年、明治になってから梯次郎と再会した顕義は、「貴方を斬ろうと一、三度狙つたがついに果たせなかつた」と告白している。

藩命で長州に戻つた顕義は、遊撃隊長来島又兵衛（一八一七—一六四）の御用掛を務めた。そのころ長州では高杉晋作のつくつた奇兵隊を中心に諸隊が生まれ始めていたが、遊撃隊は「君辱しめらるれば臣死す」を標語に玄瑞と又兵衛が結成した隊で、およそ六百人の規模を持つ。

その六百人諸共引き連れて脱藩し、決起する、と又兵衛が言い出したのが、文久四（一八六四）年の一月のことだ。苦汁を飲む長州の現状を打破するために、一か八かの賭けに出ようとしたわけだ。が、悪い方へ転べば長州がますます苦境に陥ることは目に見えている。藩は慌てて又兵衛に思いとどまるよう説得を始めた。

このとき説得役に任命されたのが、鋭氣凜然として才氣溢れるのはいいが火のような激しさを持つ高杉晋作である。一方の又兵衛も元々熱し易い気質の上に、何がなんでも脱藩すると鼻息荒く沸騰している。この場合、晋作では完全なる人選ミスだ。晋作は、又兵衛と遊撃隊の暴挙に「待つた」をかけることに成功したものの、自身が代わりに脱藩して人々を驚き呆れさせた。そしてなぜか顕義も、一緒に脱藩してし

まうのである。

「京にいる久坂や桂（孝允）から現地の情勢と空気を熟知した上での意見を聞いてくるゆえ、決起はしばし待たれよ」と、晋作は又兵衛を説得して藩を出たのだから、当人にしてみれば脱藩のつもりなど毛頭なかつたかもしれない。だが、手続き無しに国許を離れば、当人がどう言い訳してもそれは脱藩である。晋作は罪人として藩に連れ戻され、投獄されてしまった。一方、顕義は、文久二年に提出していた遊学期限が切れていなかったことを理由に、お咎め無しで身の自由を保障された。

顕義がどういふつもりで晋作と共に脱藩に踏み切ったかは、心中を当人が吐露していない以上、想像するより他にない。この時期、誰もがそうであつたように、じつと国許に待機していることが、若さをもてあましている顕義には我慢ならなかつたのではないだろうか。とにかく彼は晋作に付いて国許を離れ、晋作が連れ戻されたあとも遊撃隊には復隊せず京に留まつた。そんな折、孝允のもとに水戸天狗党から一つの報せがもたらされる。「いよいよ旗揚げに踏み切るから、共に起つて欲しい」というものだ。

■顕義、奔る

水戸は昨年の政変後も長州に心情篤く、両者はたびたび連絡を取り合ってきたいわば同志だ。藩論がまとまらないため呼応の約束は出来ないものの、孝允は彼らのために活動資金二千両を用意し、江戸にいる

はずの首謀藤田小四郎（一八四二—一八六五）へ屈けることを決めた。そしてこの金の輸送に当たったのが孝允の他、顕義と但馬の北垣国道（晋太郎一八三六—一九一五）だったのだ。藩公認ではなかったため、これは極秘に行われた。

しかし、顕義らが江戸に着いたときは遅く、天狗党は筑波山で挙兵したあとだった。このため顕義らは、後に天狗党の総大将に担ぎ上げられることになる武田耕雲斎（一八〇四—一八六五）に一千両を引き渡し、届けてくれるよう頼んだ。任務を遂行した孝允と国道はすぐに京へとって返したが、顕義はこのとき不思議な行動に出た。ひとり江戸に残留したのだ。

顕義は、なんとかして天狗党と合流し、彼らと共に闘いたいと考えた。昨年の八月以来、長州の失脚で日本中の尊皇攘夷運動が停滞している。一時期弱まっていた幕府は再び力を盛り返した。水戸はそういう現状を打開するために起ったのだ。チャンスを持つのではなく自らつくろうとするその精神は、無謀ではあるがいかにも純粹で、師松陰の教えにも通じている。

いや、なによりも顕義自身が現況に焦りきっていたのだろう。

だが、幕府の警戒厳しく合流叶わぬまま、三月から六月までをいたずらに過ぎしてしまう。そうするうちに京で池田屋事変が起こり、多くの同志を新撰組に殺された長州がとうとう進発するらしいという噂が顕義の耳にも飛び込んできた。他藩の乱に加わっている時ではない。顕義は、一路京へと疾走した。

ちなみに一千両を渡した武田耕雲斎だが、この人物に対して顕義にはなにか特別な思い入れでもあったのだろうか。耕雲斎は墨竹画をよくしたが、顕義は戊辰の役の際、わざわざ耕雲斎の絵と梁川星巖（一七八九—一八五八）の詩を求めて箱に詰め、その上蓋には木戸孝允から一筆入れてもらい、大事に戦場まで持参している。

星巖は松陰とも付き合いを深めた詩人で、「吹きすさぶ雪の中、飲む乳もない境遇の赤子が、後に大軍を動かす名將に育った」という義経を詠んだ詩が志士の間でもてはやされていた。逆境から立ち上がった顕義も、自身をその詩の義経と重ねたことがあったかもしれない。

顕義が関西に駆けつけたとき、東上してきた長州兵は、伏見、山崎、嵯峨の三箇所に分れて駐屯していた。顕義は遊撃隊のいる嵯峨に合流せず、慕っていた久坂玄瑞のいる山崎へと向かった。

九月十九日未明、二千数百余の長州兵は、京の地に屍を晒す覚悟で、姓名と『赤心長州』と書いた布を着物に縫いつけ、まるで集団ヒステリーの如く、策という策もないまま三方向から決起した。そして、会津と薩摩を中心とした諸藩連合軍に瞬く間に征討されてしまうのだ。

このとき玄瑞と共に山崎を出発した顕義は、西街道を松原通り目指して進軍し、前関白鷹司輔熙（一八〇七—七八）の屋敷の堀を盾に防戦したが、越前、桑名、薩摩、会津の四藩の兵に十重、千重に囲まれて攻撃され、敗走を余儀なくされた。この、戦闘というよりは鬪りものに近い殺戮の中で、実に多くの松門

第三章 幕府との対決

■大島奪還

禁門の変以降、幕府を倒して政権をとるまで、顕義の生活は戦漬けになる。

元治元（一八六四）年、長州内訌戦。

慶応二（一八六六）年、四境戦争。

明治元（一八六八）年、翌二年、戊辰戦争。

顕義が華々しい活躍を見せ始めるのは、このうちの四境戦争からだ。この戦は、四方向から攻め寄せてくる幕軍（諸藩連合軍）と、長州が命運を賭けて闘った戦で、幕府滅亡の原因となった。ここでいう四方向とは大島口、芸州口、小倉口、石州口のことだが、初めから捨てる覚悟で臨んだ大島口以外、長州藩は場所によっては二十倍以上の幕軍と対峙して少しも引かず、領内へは一步も侵入を許さぬ見事な戦いぶり。で事実上の勝利をよぎ取った。

顕義はこのうち「もっとも激烈をきわめた」と言われる芸州口に、御堀耕助（大田市之進一八四一—七

の同志が命を落とした。入江杉藏は会津兵の練り出す槍に顔面を突かれて戦死、負傷して動けなくなった玄瑞と寺島忠三郎は燃えさかる屋敷の炎に飲み込まれながら、互いに刺し違えて自刃した。

一方、顕義は生き抜いた。全員が死ぬわけにはいかないからだ。松陰の時の種が実るまでは、誰かがその志を引き継いで明日へ繋げなければ、これまでに同志が流した血の全てが無駄になる。顕義は、混戦した戦場を駆け回った。随所に新撰組や見廻組が網を張り、怪しいものは片っ端から捕縛、逆らえば斬り捨てる構えだ。それらを突破して長州へ戻れたら、それはまさに奇跡と思われた。が、顕義は鬚を切り、西本願寺の協力で僧形に変装すると草を噛んでも落ち延びたのだ。

■晋作の後を継ぐ

四境戦争で大挙して押し寄せてきた幕府軍を蹴散らした長州藩だが、戦場で圧倒的強さを見せたのは正規軍ではなく、奇兵隊ら諸隊であった。そしてそれらを総督として統べたのは高杉晋作である。当然、誰

も退却の体勢に入っていた。顕義はこの日のことを、「月が暗くてよく見えなかったが、敵艦の灯火を指して砲を放った。十四、五発も放ったから当たったものもあると思う」と語ったが、実際は幕艦を大島沖から撤退させる快挙であった。

と十数隻の和船が居座っている。

作戦の指揮官は立案者の晋作で、顕義は砲手を担当した。

六月十二日、早天。月が落ちて朝日が昇るまでのわずかな時刻を狙って作戦は敢行された。顕義らを乗せた丙寅丸は闇に乗じて敵艦へと近づき、突如、砲撃を開始したのだ。

急のことで幕艦は大艦といえども狼狽はなはだしく、早急に対処することがままならない。艦と艦の間を自在に疾走しては、七、八発ほども続けざまに砲撃を繰り返す丙寅丸に、敵艦はいよいよ的にされた。ようよう幕艦が蒸気機関に火を入れ、攻撃に移るころには、さらに砲門から火を吹きつつも、丙寅丸は退却の体勢に入っていた。



丙寅丸が戦った久賀沖（山口県周防大島町）

一）率いる御橋隊の軍監として着任した。芸州口は長い海岸線を死守せねばならなかったが、長州は軍艦を全て小倉口に投入したため、彼らは船のないまま幕府海軍と陸軍の両者と対峙した。艦砲射撃を受けつつ、敵軍に比して圧倒的に少ない兵力で戦わなければならなかった顕義は、正面には人の代わりに火力を集めて敵を引き付け、人数はむしろ間道に割き、横腹や背後を突く奇襲戦法を駆使して敵兵を攪乱した。

このため、「よく寡兵を指揮して戦い、幕軍を翻弄した若い隊長」と敵兵から称えられている。

また特筆すべきは大島の戦いだろう。芸州口の火蓋が切られる少し前、顕義に一つの藩命が下った。幕軍に占領された大島を奪還するため、高杉晋作と共にわずか九十四トンの小型軍艦『丙寅丸』に乗り込めとの指令である。一夜限りの特別任務だ。共に乗船したのは、二人の他には田中顕助（一八四三—一九三九）、河野留之進、土屋平四郎と数人の水夫のみ。目指すは大島沿岸で、そこには幕府方の四隻の洋式軍艦

頭義の双肩にどっしりと重圧がのしかかってきた。前回の戦までは、一諸隊のトップですらなかつたというのに、一気に八つの諸隊を任せられることになったのだ。そんな頭義に、今まで生死を共にしてきた同志の御堀耕助は面白くないものを感じていたのか。ある日、衆人の前で頭義に辱をかかせ、二人の仲は決裂する。

これから赴く戦への藩政府の準備状況を、政府の一員である耕助に頭義が尋ねたときの出来事だ。耕助は頭義の質問を全て「知らん」の一言であしらったのだ。二人きりのときならいざ知らず、今から戦場に連れて行く部下の前である。ただの部下ではない。これまでは頭義の上位にいた者たちだ。ただでさえ俄か指揮官のあまりの若さに微妙な空気が漂っていただろう中で軽んじられた頭義の屈辱はどれほどだったか



頭義を後継者に指名した高杉晋作

もが晋作を中心にこれから始まる幕府との最後の決戦に臨む気概であったろう。しかし、晋作の命の火は新しい世を見る前に燃え尽きようとしていた。小倉口の戦場にその勇姿をさらしながらも、四境戦争のときにはすでに末期の労咳（結核）だったのだ。晋作は逝く。その前に、諸隊幹部は至極大事なことを晋作に訊かねばならなかった。すなわち、後継者は誰か、と。

晋作は答えて言う。「大村益次郎（一八二四

一六九）がよろう

益次郎は長州領鑄銭司村の村医の出だが、優れた西洋兵学の知識を買われ、伊予宇和島藩に上士格で雇い入れられていた過去を持つ。そのとき益次郎は近代化の象徴ともいえる蒸気船の模型を造り、試運転を成功させた、いわば一種の鬼才であった。その益次郎の才に惚れた孝允が、口説き落として長州に連れ戻したのだ。益次郎はそれ以降、長州の軍制改革に欠かせぬ人物となった。四境戦争の時は石州口を担当し、鮮やかに敵を追い上げ、退却させている。のちには明治政府に任えて日本陸軍の基礎を築いた男だ。その

実力は疑いようがない。ただ、益次郎は諸隊の人間ではない。

諸隊の連中は納得できなかったのか、誰もが己の名を告げて欲しかったのか、さらに晋作に向かって尋ねた。「大村の後は誰か」

晋作は言う。「山田市之允（頭義）だ」と。

この遺言とも取れる晋作の言葉を重ねて見ると木戸孝允が、長州の軍事部門の司令塔に益次郎を据え、頭義に七百人八中隊を預けて幕府との決戦に臨むことを決めた。

頭義、二十三歳。若き駈引役（総指揮官）の誕生である。



戊辰戦争当時の顕義

たる鳥羽と伏見に兵を駐屯させた。後に言う戊辰戦争の始まりである。このとき薩摩側は大将に西郷隆盛（吉之助一八二七—七七）を出してきたが、この隆盛に匹敵する男として長州の推した将が、山田顕義だつたのだ。

弱冠、二十三歳、身長百五十五センチ。しかも、当人のせいではないが、この男、極めて重顔である。出兵当時の写真が残っているが、洋式軍服に身を包んでいるのはいいが、よくよく見るとだぶだぶで、長すぎる袖の先から指が全部は出ていない。顕義を見たときの薩摩の動搖の大きさは想像に難くない。隆盛は大村益次郎に向かい、「あの小童（こども）に何が出来る」と詰め寄つたという。

薩摩の不満はそれだけではない。初戦で用意した両藩の兵数が大きく食い違ふのだ。薩摩の五千に対し、長州は七百余。ちなみに対する幕府は一万五千あまりである。いったいやる気があるのかと怒鳴りたかつたかもしれない。だが、それらの憤懣（いきどお）も、鳥羽・伏見戦の初日が終わるころには、賞賛へと転じていた。寡兵でありながらも顕義は圧勝をおさめ、

ろう。しかも耕助は去り際に、「先刻お前の尋ねたことは、みな大村に告げてあるからそちらに聞け」と言い捨てた。

馬鹿にされたのは明白だが、顕義は重任を控えた身ゆえ、黙して堪えたということだ。

こうして決定的に修復しようもなく決裂したかに思えた二人だが、やはり最後は培ってきた絆が勝つた。耕助が病に倒れたときのことだ。下関にいた耕助は自分が死んだ後のことを実力者である木戸孝允に頼んでおきたく、しきりと会いたがつた。下関の同志から、山口の孝允へと矢のような催促の手紙が届く。だが、孝允もそのころなにかと忙しく、すぐに発つことができない。

一方、湯田にいた顕義は、耕助がいよいよ危ないことを知ると、居ても立ってもいらなくなったのだらう。飛ぶような勢いで下関へと駆けつけた。二人の再会の様子は記録されていないが、どうやら耕助は孝允に会いたい旨を顕義にも告げたらしい。顕義はすぐさま山口へと取つて返し、直に孝允を説得する。こうして無事に耕助は孝允と再会することができたのだ。孝允は、耕助の望みを聞き届け、跡取りのいない御堀家に養子縁組の世話をして家を存続させている。

■ 戊辰戦争

長州は幕府との最後の戦いに臨み、かつての政敵、薩摩藩と手を組んだ。両者は、幕府方の最前線に当

「あの小童、用兵の天才でござす」と隆盛をして感嘆させたという。翌日、顕義は、征討総督副参謀に抜擢された。長州藩内だけでなく、その実力が広く認められた結果である。

天才指揮官顕義の戦術の一番大きな特徴は、本隊の数をぎりぎりまで絞り込んで寡兵を火力で補い、残り的人数を八方に待機させ、刻々と変化する戦況に応じて自在に投入するという点だ。また、同時に海軍をよく使い、海から上陸させた衝背軍による奇襲戦法など、日本における視野の広い近代戦術のほとんどが、顕義からスタートしている点も注目し得る。

北越戦争で新潟を陥落させたときも、当の新潟に顕義が送り込んだのは、持ち駒の三割のみ。二割が予備兵だ。そして残る五割を、奥羽列藩との連絡遮断のために戦場とは逆方向へ進軍させ、敵軍の逃走経路を断つと共に、援軍から孤立させることに成功している。こうして思わぬ伏兵の存在を遮断することで、ほぼ顕義の計算したとおりに戦況は進行していくのである。

ちなみに本隊の兵力の少なさは、新潟港に浮かぶ軍艦からの艦砲射撃で補っている。

この北越戦争は、海軍参謀として赴任した顕義が、海からの大規模な衝背軍上陸作戦を日本で初めて成功させた記念すべき戦いでもある。当時の東国は会津を中心に奥羽越列藩同盟を結び、薩長主導の新政府軍に激しい抵抗を試みていた。中でも北越戦線は顕義が着任するまで、長岡の河井継之助（一八二七—一六

八）の巧みな戦術と長岡保有の近代兵器サトリング砲の威力に翻弄され、苛烈を極めていた。松門の時山直八（一八三八—一六八）が戦死したのもこの戦線である。

北越戦争の戦局を変えるため派遣された顕義は、敵の物資の補給路である新潟（背面）と、継之助守る長岡（正面）を同時に攻めることで敵の混乱を誘う策を考えた。もとよりこの地に布陣していた山縣有朋らに長岡側を任せると、自分は新潟を攻め、両地点の陥落をわずかに数刻で成功させた。

北越の成功は、会津方面の戦局にも影響し、この二ヵ月後には奥羽越全全ての藩が、恭順、降伏することになるのである。

こうして顕義は、戊辰の役最後の戦場箱館を攻める陸海軍参謀に任命され、新政府軍の実質上の最高司令官として戦地へ向かうことになったのだ。

箱館戦の顕義も鮮やかであった。敵の牙城五稜郭のある箱館から三本の道が伸びている。顕義は、これらの道の終結地乙部村を上陸地に選び、背後から衝かれる憂いをまず無くすと共に、敵の逃走経路を遮断した。三道から同時進撃することで敵の兵力を分散させ、小さな戦闘を繰り返しながらじわじわと箱館に近づき、敵兵を精神的にも物質的にも追い詰めていった。箱館総攻撃のときには、敵軍が陣を敷いた五稜郭と弁天台場の二箇所を連絡経路を、艦砲射撃による砲弾で遮断した。それぞれが孤立したところで、三道の兵は五稜郭を、箱館山方面から上陸させた衝背軍は弁天台場を攻め、戦場をいたずらに混戦させるこ

第四章 条約改正に向けて

■ 頭義、海を渡る

頭義にとって人生最大の転機は明治四（一八七二）年十一月に訪れた。特命全權大使岩倉具視（一八二五—一八三三）の米欧使節団に理事官として随行したのだ。岩倉使節団は、安政年間には結んだ不平等な通商条約の改正期限を翌年に控え、改正延期を申し入れることを目的として派遣されたものだ。

頭義ら松陰門下生は、元をただせばこの通商条約の締結に憤懣を募らせ、倒幕に立ち上がった。こんな国益を損ねる条約を結ぶ幕府に日本を任せていれは、いずれ侵略されてしまうという危機感が大きな刺激となった。そうである以上、幕府を倒した明治政府の悲願は、条約改正にあるのである。だのになぜ、岩倉使節団は改正延期を申し入れねばならなかったのか。

この時代、世界は「万国公法」と呼ばれる米欧諸国の打ち立てた国際法が存在した。そしてこの国際法にのっとった近代的憲法を持った国のみが、文明国と呼ばれていた。ゆえに、近代的な国体の整わぬ日本は文明国とは認めてもらえず、米欧諸国からはとてもまともに相手にしてもらえぬ位置にあったのだ。

となく陥落させている。

この箱館戦争では、西郷隆盛が薩摩から援軍を軍艦に乗せ、自らが最終指揮を執るために航行してきたが、出航前に大村益次郎が、「貴公が着いたときには戦はもう終わっている」と予言していたとおり、到着したときには全ての片が付いてしまっていたという。

松陰を殺された十代の日の立志からおよそ十年、頭義は幕軍を平定して松門の恨みを晴らしたが、降伏兵への人格を無視した扱いはなく、きわめて丁寧に遇したということだ。敵将榎本武揚（一八三六—一九〇八）とは、のちに心を許しあう友人となった。

明治四年と言えば、徳川を倒して明治政府へと政権交代してからわずか四年しか経っていない。とても期日の来年までには、国際法に基づく国体は整わない。だから「三年待つて欲しい」というのが明治政府の言い分である。

岩倉使節団は、今度の米欧滞在中に、日本を文明国にすべく国内改正の方策を学ぼうと、いくぶん無邪気に意欲を燃やして出立した。顕義も例外ではない。陸軍事務官である顕義は、近代的軍制改革を行うための視察を目的に渡海したのである。

■大失態

意気揚々と出掛けていった使節団だが、最初の訪問国アメリカで大変な過ちを犯してしまう。アメリカのあまりにフレンドリーな歓待ぶりに、もしかしたら国体を整えるまでもなく、このまま条約を改正してもらえないと勘違いしたのである。

それでは、アメリカ側の真意はどうであったのかといえば、自分たちにとっておいしい利権が絡む条約を改正してやる気など端々からない。ある程度譲歩することで日本側を油断させて肝心な部分は煙にまき、いつそ日本にとって不利となる条約に調印させようとしていたのである。

つまりは外国人の日本国内への自由な雑居を認めさせようとしていたのである。

かつて幕府が結んだ条約は、確かに二点の決定的に不平等な条約を含んでいた。が、外国人の国内雑居は認めていない。外国人は居留地と呼ばれる場所以外での自由な商取引も、土地の売買もすることはできなかった。日本国内における外国人の動きは日本政府の監視下にあり、それはすなわち外国資本による日本支配を、かろうじてまぬがれている状態であったと言えるのだ。

もし、これらを認めてしまえば、外国資本が国内に流入してくることになる。そんなことになれば資本力の格差から、あつと言つ間に只同然の価格で一等地を買い占められ、日本国土は外国人のものになってしまうことだろう。その地には外国の会社が建ち、自由競争の中で外国資本に対抗し得る力のない国内産業は、ことごとく従属させられることになる。

土地と労働力を米欧諸国の資本家たちにささげなければならない社会、それを従属国と言わずしてなんと呼ぶのか。

明治政府の高官たちは、国が支配されるときは武力によってなされるものだと思っていた。だが実は、外国資本の流入によるマネー支配の方が目に見えぬ形で侵食されていくのではるかに恐ろしく、根深い問題を孕んでいるとは思いついていなかった。幕府を散々非難してあまつさえ倒してしまった彼らは、自分たちがこそが一步間違えれば国を売るところだったとやがて気づき、蒼白になった。

顕義にとっても、これはショックなどという生易しいものではなかったはずだ。しかし、この蹉跌こそが今後の顕義を突き動かす原動力となった。顕義は今度の失敗で、国際法にのつとつた国体、つまりは近

一度ならずあったようだ。一々何について語り明かしたとは記されていないが、憲法についても打ち合わせを繰り返したものと思われる。

ところでこの渡海中、顕義は彼の性格を現すエピソードを残した。正月にあわせて大使、副使、理事官たちを自分の合宿所へ招待し、日本料理を作って振舞ったというものだ。招待した人数は一人二人ではなから材料は日本から取り寄せたものと思われる。思いつきというよりは計画を練って実行したのでろう。顕義は無口な割りに、平素から人を喜ばすことには労を惜しまぬところがあり、プレゼントをするときも凝り性で、忘年会の計画や連絡なども率先してやっていたようだ。使節団の米欧への滞在期間は一年数ヶ月に及ぶ。ずいぶんと日本が恋しく思われたはずだが、みなの中心を癒すため、結構な人数分の料理をけなげに作る姿に、顕義の手柄がしのばれる。

また山田家の蔵には顕義時代のフランス語で書かれた色っぽい小説が積まれていたという。この渡海中に顕義本人が買い求めたものだろうか。そうだとすればなかなか隅に置けない一面も持っていたといえるだろう。



長州の親玉 木戸孝允

代的法治国家への素早い歩みを見せなければ、米欧を中心とした国際社会の中では対等に口をきいてもらえないことを痛感した。今の日本にとって一番の急務は憲法制定であり、法典の編纂だったので。

具体的に憲法制定に動き出したのは薩摩の巨頭大久保利通（一八三〇—一八七八）と長州の親玉木戸孝允である。この二人は仲が悪かったため、両者の間に協力関係はなく、目指す方向は立憲君主制と同じであったにもかかわらず

らず、別個のうごきを見せた。

顕義は孝允と非常に近い間柄であったため、彼の補佐をすることで憲法制定に力をつくしていこうとした。日本で最初に私擬憲法案を起草したのは長州の青木周蔵（一八四四—一九一四）だったが、これは孝允の依頼で為されたもので、『青木周蔵自伝』の巻末には、「憲法については、明治初年（明治五年—六年）以来、木戸、山田顕義を通して立憲工作をすすめていったと記されている。また、孝允の日記にも渡海中、顕義としょっちゅう顔を合わせて談合する様子が記されており、夜を徹して語り明かしたことも

■大和魂を守る戦い

明治六（一八七四）年、岩倉米欧使節団は帰国した。が、顕義も含めた彼らのほとんどが、日本の土を踏むころには保守的になっていたから面白い。彼らは米欧を視察する中で仰天する光景を見てしまった。資本主義社会である米欧諸国においては、政治が利益を追求する手段として取り扱われていたのである。現在の私たちから見れば当たり前前の光景だが、そこはつい最近まで江戸時代だったころの話だ。政治というものは、利のためではなく、もっと仁や徳というものが根底になければならない、つまりは私欲を捨てるところから発していなければならないというのが日本の武士道に沿った為政者のあり方である。利潤が正義に繋がる資本主義社会の有り様は、日本のサムライには青天の霹靂（さいれき）だったのだ。

木戸孝允にしろ、大久保利通にしろ、顕義にしろ、これは承服できないと考えた。外国の文明は日本の近代化のために取り入れなければならないものの、文明の直輸入は危険であるというのが、彼らの共通した感想である。日本には日本古来の風習やよさがあるのだから、それらを捨てては駄目だ、日本人にあった形に変えて文明というものは輸入していかなければならない。だから憲法も法律も日本にあった形で取り込むべきである、と強く考えるようになっていた。

顕義はこの件に関して次のように発言している。

「日本人たる自覚を持ち、日本精神を基調とし、日本固有の学問の上に欧米文明を取り入れ、日本文化を高揚し、もって国運の隆昌と人類の福祉を増進させる」べきであると。古来の日本を失った近代化には意味がないと言いつけているのだ。

「日本人とはなんなのか」——これの答えは不朽でなければならない、時代やその時々々の流行で変わるものではない、と主張して顕義は当時の日本の合言葉でもある「文明開化」に警鐘を鳴らした。

だが、顕義ら帰国組のこれらの考え方は、使節団に参加しなかった政府の居残組には理解されず、この後、両者の間に摩擦を生んでいく。海外を直に目にしていない居残組は、極めて進歩的な考えで日本を変えていこうと彼らは彼らなりの夢と希望を持っていた。外国の実態を見ていない彼らには、文明というものがきらびやかなものに思え、あれはいいものだど純粹に信じているから、どんどん取り入れることを躊躇（ためら）わない。

ゆえに国の根幹となる憲法の形を巡り、帰国組と居残組で争いが起こってくるのは当然の成り行きだったかもしれない。顕義は今後、実にこの戦いに挑んでいかなければならなくなった。それは顕義に言わせれば松陰の大切にしていた「大和魂」を守る戦いでもあったのだ。

憲法制定を巡る争いで、大きな山は二回起こった。明治六年の政変と明治十四年の政変だ。

に取り組んだ。二人はもとより兵学の師と弟子の間柄であったから、息の合った軍制改革を促進させていけるはずであった。ところが兵部省がスタートしてわずか二カ月後に益次郎は暴漢に襲われ、さらに三ヵ月後には傷の悪化が原因で永眠してしまったではないか。顕義は政府の命でまだ息のある益次郎から、今後の兵制改革の計画をつぶさに聞き取り、その衣鉢を継いだのである。

弱冠二十五歳の顕義を国の最重要項目である軍部のトップに就けるのは早すぎる。政府は益次郎の後任に前原一誠を任命したものの、当時一誠は明治政府に反発を覚えて引きこもり状態だったため、実際に兵部省を引っ張っていったのは結局、顕義であった。

ところが明治三年、軍政視察のために西洋に渡海していた山縣有朋が日本へ戻ってきた。そしてやる気のない前原一誠と入れ替わる形で顕義の上司として任官したのだ。顕義は益次郎の意思を継いで邁進していたが、有朋には彼なりの構想があった。だのに有朋は本心を隠し、顕義の意見には「やったらよからう」とうなずき続けた。それは顕義が岩倉使節団に随行するために兵部大丞を免ぜられるまで続いたのだ。

自分が日本を去ったあと、誰はばかることなく己の構想通りに軍部を作り変えていった有朋という人間を、顕義は理解できなかったろう。明治六年に顕義が日本に戻ったときには、兵部省は有朋らの手で陸軍省と海軍省の二省に分離させられていた。益次郎の遺志を継いで顕義が心血注いで作り上げてきた兵部省の姿は、もうそこにはなかったのである。

■ 顕義、陸軍省を去る

顕義が米欧から帰国したとき、彼の所属する陸軍省のトップは山縣有朋だった。顕義とは同郷で同じ松門でもある。さらに先の北越戦争では、戦局を上手く打破することができずに失脚しかけた有朋を顕義が救う一場面もあり、有朋も当時の様子を「山田の閑原（あひだ）に来たるは、余のもつとも歓喜に堪（た）えざりし所なり」と嬉しさを書き記すなど、二人は協力体制をとってやってきたはずであった。それなのにこのころには両者の仲はぎくしゃくと軋み始めていた。二人の思い描く陸軍の未来があまりに違っていたからだ。



陸軍省のトップ 山縣有朋

兵部省がスタートしたとき、兵部卿の位には仁和寺嘉彰親王（かあきしんのう）が名目上就いていたが、実質のトップは兵部大輔の大村益次郎であり、兵部大丞に就いた顕義は益次郎の下で、明治の兵制をゼロから立ち上げて行く難業に果敢

民に教えるのではなく、兵には教養が大切であるから、戦う方策を教えると同時に一般教養ならびに普通学を学ばせるべきである。文武が偏ることなく教育すれば、その者は必ず、「国権を保護し而て又各自所有の権を固持し決して他人をして侵奪せしむべからざるの理を講究する」だろうと頭義は述べ、有朋が推進しようとしている徴兵制に『時期尚早』と異を唱えた。

頭義の何事も教育が先だというこの考えは生涯変らず、彼は教育事業には常に心を砕き続けた。大坂兵学寮を開講、皇典講究所設立、日本法律学校（日本大学前身）設立、国学院創立。

松下村塾で大きく開眼し、世に飛び出した頭義は、いかに人が教育に左右されるかを身をもって知っていた。よい人材はよい師の下で育つのだ。人は無限の可能性を秘めている。その可能性は引き出して育てやりさえすれば、国を变革するほどの力を持つのである。国民一人一人の自覚と向上が明日の日本を発展させ、果ては真の国力隆盛に繋がっていくのだと、頭義は常に胸中に松陰の存在を感じながら信じていたのである。

そして延期論を主張して有朋と激しくぶつかり、顔の二、三発も殴った頭義は、とうとう事実上の左遷を命じられてしまうのだ。

このとき頭義自身が有朋と本気で争う気構えを見せていれば、実際のところ形勢はどう動いたかわからない。有朋の伝記『公爵山縣有朋伝』には次のような一節がある。

「当時山田の陸軍部門における勢力は殆ど公（山縣）と拮抗してゆずらざるものがあつた。曾我祐準の如



頭義により創立された日本法律学校跡
(東京都千代田区)

婦国早々頭義は、早急なる徴兵制を基調とした有朋の軍制改革に反対して建白書を提出した。

「兵は凶器なり」と書き出された建白書の中で、軍のマイナス面を幾つか述べ、これほどまでに害があるのになにゆえ軍が国家に必要なのか、を問うている。軍のプラス面は、皇室を守るためであり、国土を保護し、人民に安全を与えるためだが、「帝室を守衛し人民を安全にするの具、国に法あり律あり、教育あり」と頭義は言う。

人々が法律を必要としないほど公正であつたなら兵は必要ないのだが、現実はそのようではない。だから排除するわけにいかないが、その扱いは慎重を極めねばならない。

「すなわち我が国体と法律を知り、各国古今の兵政を斟酌し、その利害損益を比較し、我が国人民の上において、その利益のあるゆえんを知り、しかるのちにこれを設置せざんばあるべからず」

国民皆兵については、人民がよくその必要性を理解した上で徴集すべきである。また戦うことのみを国

き、小沢武雄の如き、また山田派であったため、彼（顕義）の主張したる徴兵延期論は、公に取っては、悔るべからざる勁敵であったに相違がなかった」
 だが顕義は、軍部を派閥で割り、できたばかりの明治政府に亀裂を入れて揺さぶるような真似はしなかった。そのころ顕義が大事を引き起こさずとも、太政官で起こった争いで、政府は真つ二つに割れて空中分解を起しそうな嫌な空気が流れていた。顕義がこれ以上、我を通せば、太政官の争いに軍部の抗争がかぶさり、明治政府が崩壊せぬとも限らない。悔しさはあつたが、顕義は退陣の道を選んだ。陸軍省を去ることを決めたのだ。

■明治六年の政変

では、太政官内の争いとは何か。目立つところでは、西郷隆盛が外征すると言いついて起こった征韓論争がある。帰国組からしてみれば、今から憲法制定に取り組んでいかねばならないという時期に、外征などいともない話であつた。

が、さらにこの征韓論争の派手さに隠れる形でもう一つ、もつと深刻な争いが左院内で起こつていた。とにかく、一から十までことごとく帰国組と居残組の意見が合わなくなつてしまつていたので。

左院は当時の立法機関だ。争いを起こしたのは佐賀の江藤新平（一八三四―一八七四）である。岩倉使節団

が日本を発つとき江藤新平は左院副議長の席にあり、民法を手がけていたが、「フランス民法を訳して表紙に『日本国民法』と書けばよからう」と手荒な発言をしたことで知られる人物だ。

この新平が、憲法制定が急務と気付いた大久保利通の渡海先から送られてきた憲法論を握りつぶしてしまったのだ。利通が立憲君主制を目指したのに対し、新平は立憲共和制を目指していた。

「人民に立法政治とは何たるかを知らしめる以前に、権利を与えてはならない。その国の事情を無視した先走つた理想の輸入は危険だ」と利通は言うが、「形を作ってしまったえば、混乱はあつてもやがて人心も追いつく」というのが新平の主張だ。二人はまるで水と油だ。己の思い描く理想の日本を実現させようと思えば、互いに倒さねばならぬ政敵であつた。

新平は利通側近の伊地知正治左院議長（一八二八―一八八六）を、理由をこじつけて辞任に追い込み、左院の仕事を抱えたまま司法省に移つて司法卿に就いたと思つや、利通不在の大蔵省から民事裁判権を奪い、利通の留守を預かる井上馨大蔵大輔（一八三五―一九一五）を辞職に追い込んでしまうのだ。さらに、当時東京府直属だった警察を司法省の管轄に組み入れ、司法省の下に検事の職を置いて裁判の監視に当たさせた。司法省に権力が集中したのだ。権力を握つた新平は四民平等を謳い、人民を古い時代の因習から解放すべく改革を次々と行つた。

それだけでなく、優秀なこの男は太政官制度をも隣く間に変革してしまつた。内閣を新たに設置して参議を内閣の議官と定め、飾りのようになっていた正院に右院各省の権限を吸い上げ、利通の帰るべき大蔵



顕義を司法省に入れた大久保利通

からだ。利通がうんと言えは、それで顕義の警保寮入りは決まる。だが、このころ警保寮には利通腹心の川路利良（一八三六―七九）^{かわじとよし}がその長に就き、すでに遠大な構想で改革に着手していたから、かき回されなくなかつたようだ。なまじ顕義は優秀な分、部下に付けるにはやりにくい男だ。利通は首を縦にはふるなかつた。ふらなかつたが、佐賀の乱で江藤新平討伐に自ら向かつたその先に顕義も連れていき、傍に置いて人柄と思想を確認した。

当の顕義は自分が試されているなど意識している様子もなく、ひと戦終えた後で気も抜けて、実に暢気な冗談溢れる手紙をせっせと綴っていたようだ。佐賀から出した手紙には面白いものが多

い。「なにぶん朝から晩まで菜根汁食い、獨衾孤枕にて英雄豪傑の士ながら鯛を干した如く長の夜を大息にて寝ねばならぬには大いに困迫まかりあり申しそうろう。言語の通ぜぬ欧米諸国にてすら不自由はなきに、辭のよく分かり色の黒きまさとど目にはたため我が天子陛下の知らし召す皇天国の中にて、かかる難儀も

省の地位を低下させたのだ。利通が日本に戻ってきたとき、大蔵卿である彼にはなんの発言権もなくなつてしまつていたのである。

利通は新平と戦い、倒さねばならなかつた。新平が西郷隆盛を担いだため、両者の争いに征韓論争が絡み、政府は真つ二つに割れる危機に陥つた。これは結局、利通側の勝利に終わり、このとき敗れた政府の主要人物、江藤新平、西郷隆盛、副島種臣（一八二八―一九〇五）、後藤象二郎（一八三八―一九七）、板垣退助（一八三七―一九一九）等、多くの高官が太政官を去つて下野することになった。政府の高官が下野すれば、政府に不満を持つていた連中が彼らの周りに集まり始める。反旗を翻すその旗頭に担ぎ上げるためだ。一足先に下野していた前原一誠の下にも、不穏な連中が集まつている。こうして翌、明治七年の佐賀の乱を皮切りに明治十年の西南の役が終結するまで、次々と萩や秋月、熊本などで反乱の火の手が上がり、明治は内乱の時代に突入するのだ。

■ゼロからの出発

顕義を司法省へ入れたのは大久保利通である。木戸孝允は軍部に比較的働きの近い警保寮に移してやるのが当人のためになると思つたらしく、利通に顕義の就職の斡旋を頼んだ。それというのもそのころ利通は、太政官に新たに内務省を作つて内務卿に収まり、司法省から警保寮を移して自分の管轄に置いていた

あるかと毎晩英雄や豪傑の泣声、ワーンワーン、夏の夜の蚊よりもやかましくきこそうろうと」

この手紙を読むと、顕義は色黒だったのだと改めて納得させられる。欧米にあつては、西洋人の中でずいぶん目立って難儀したであろうことが文面から容易に想像でき、また、その状況を自らジョークにしてしまう長州人的ユーモア氣質が楽しい一筆である。

さて、陸軍省を出て宙に浮いている顕義の身の振り方だが、利通は顕義と会話を重ねるうちにこの男なら我が国の司法を任せても良いと考えるようになったようだ。司法卿である江藤新平が処刑され、これまで司法省ナンバーツーの座にいた大木喬任（一八三一九）が繰り上がって司法卿に就任した。このため、今まで喬任のいた司法大輔の席が空いている。どうだ、やってみないか、というわけだ。

司法省——。顕義は、今までとはあまりに畑が違ふその仕事をざっと思い浮かべたはずだ。

明治四年に初めて設置された司法省の仕事は、元々は刑事裁判に関わるもののみであったのが、江藤新平が司法卿就任時に大蔵省管轄の民事裁判の仕事も移してようやく裁判権の一本化が実現したばかりであった。新平は司法省を「全国の裁判所を統括、その事務を行う」部署と規定した。が、実際は統括しようにも、府県裁判所の設置そのものが、まだ二割しかできていないのが現状だ。建物ができていないだけでなく派遣すべき裁判官や検事も育っていない。だからまずは、司法官の養成が急務であった。また、民事の統括は、廢藩置県は行われたものの藩色が濃く残る地方の強い反発を受け、思わぬ対立を生んでいた。いや、なにより裁判云々の前に、日本には確たる法律がない。日本の司法は何一つ形になっていない。

顕義はこの転身を非常に悩むことになる。今まで軍事一筋できた自分が、まったく知識もない法律畑に進んで、出来上がった仕事を継ぐならまだしも、先駆者として果たして役に立つのだろうか……。しかし、日本にとって法の整備がどれほど大切な事業かは先の洋行で肝に銘じている。今の日本により大切なのは軍より法だ。自分でそう建白書に書いたではないか。わからないところは学べばいいのだ。

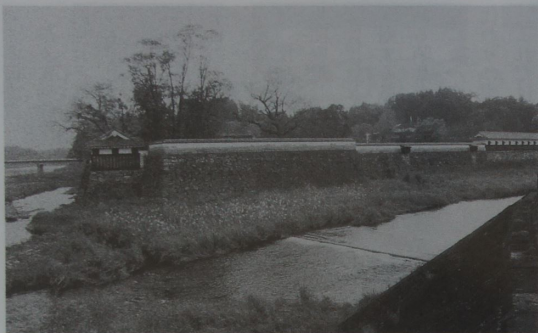
「やろう」と顕義は決意した。

明治七年、こうして顕義は司法大輔に就任した。軍事方面ではスペシャリストだが、法律はゼロからのスタートである。学生に混ざって講義を聴き、猛勉強を繰り返した。そして白紙に近い状態から、十年もたたぬうちに日本でもっとも法律に詳しい男になるのである。

顕義のちに我が国のほとんどの近代法典の編纂を手がけて「小ナポレオン」と呼ばれるようになる。ナポレオン一世は、優れた軍人であると共に法典編纂をも手がけてフランスの近代化に尽くしたが、顕義もまた、軍事面で優れた資質を発揮しただけでなく、司法大輔、司法卿、司法大臣を歴任し、刑法、商法、民法の編纂に命を削り日本の近代化に力を尽くしたからだ。

明治八年、政府は国家の最重要事項として立憲政体を起こすための法整備を掲げ、左院は廃止して新たに元老院を設けた。さらに行政裁判を行う大審院を置いた。顕義は、この流れの中で刑法編纂委員長に任ぜられ、日本はいよいよ法治国家へ向けて強い自覚と共に第一歩を踏み出した。

ところが、二歩目を踏み出す前に頓挫してしまうのだ。乱が、西南の地に起こったからだ。



人吉城跡 (熊本県人吉市)

を成功させている。実に籠城から五十四日振りの解放であった。熊本城連絡で任務を果たした顕義は、ここで軍服を脱いで戦線を離脱するつもりであった。が、西南戦争の総指揮を執っている山縣有朋が離したがらない。顕義は公務に私情を挟むタイプではなかったので、明治六年の有朋の仕打ちには目を瞑り、協力を約束して戦場に残った。

有朋が智謀の将顕義を離さないのは当然で、このあとに西南戦争の『関が原』と言われる熊本平野の戦いが控えていたのだ。これは木山を要に北は天津から南は御船まで扇形に陣を敷いた薩摩軍八千に、政府軍三万が総力をあげてかかっていく戦で、戦線は三十二キロにも及ぶ一大決戦である。このときも破れば後がない決死の薩摩軍に新政府軍は押されて敗色が濃くなる中、ただ一箇所、御船を戦場にして闘った顕義の軍だけが、日の出と同時に開戦して朝の十時には圧倒的な勝利を収めていた。顕義軍の死傷者、わずかに四十四人。

■西南戦争

西南戦争は明治十(一八七七)年、西郷隆盛が明治政府に意義を唱えて決起した土族最後の反乱だ。隆盛は従う薩摩武士で八大隊を編成し、東を目指した。対する明治政府は、十旅団と一鎮台で相對する。顕義は陸軍少将別働第二旅団の司令長官として九州の大地に降り立った。

いったい、司法大輔である顕義が、なにゆえ司法の仕事を放り出し、西南戦争に出陣しているのか。理由は単純である。顕義がいなければ薩摩軍を平定できなかったからだ。日本最強と言われた西郷軍に對し、政府軍の中では顕義だけが対等以上の戦いぶりを見せたと評された戦だ。戦術の泰斗と言われるこの男には、西郷軍が熊本鎮台の拠点、熊本城を包圍し、さらに官軍と田原坂で対峙したと知ったとき、すでに作戦が立ち上がっていた。海軍を使い海から熊本の背面に兵を上陸させる顕義得意の衝背軍上陸作戦だ。だが、このとき顕義は戦場とは無縁の場所にいた。このため顕義の策は軍部によって無視された。軍を去った男の意見など聞く必要はないと判断されたのだろうか。

しかし、田原坂はいつまでたっても抜けず、熊本城に籠城した鎮台兵は食料が尽き、干上がる寸前になってしまった。このままでは鎮台兵は全滅する。ここにいたって政府は顕義の九州派遣を決め、衝背軍上陸作戦が敢行されたのだ。顕義は期待通りの働きで敵を蹴散らしながら熊本平野を駆け抜け、熊本城連絡



西南戦争から凱旋し宮中参内した際の写真。左から4人目が顕義

よる略奪が出なかったというから、よく統率されていたのだ。さらに顕義の陣営だけが戦時中の男所帯にも関わらず塵一つ落ちてなく、大砲置き場には寺院の庭よろしく箒の掃き目が付けられ、さらに非常時にはしなくてよい上官への敬礼が平時通りに行われていて他の旅団を驚嘆させたという。西南戦争時の旅団長たちの集合写真が現存するが、これを見ても帯がまったく曲がらず地面と平行に結ばれているのは顕義ただ一人だ、こういうきつちりとした性格が兵にも伝染するのだから。

対する薩摩軍一千人。未曾有の大勝利である。

「早々に勝利を取めた顕義は直ちに薩摩軍の司令本部が置かれた木山を急襲した。本部を叩かれた薩摩軍は総崩れとなり、戦は明治政府の勝利で終結した。敗走した薩摩軍は、八代から六十四キロの地点、人吉に逃げ込んだ。有朋は四つの旅団を顕義に預け、人吉攻略の全権を委任した。これを受けて顕義は、右翼から左翼まで八十キロに及ぶ山岳地帯の戦線を七つの道から同時進撃させる神業で二十二日目には人吉をも陥落させたのだ。」

このとき顕義は降伏兵に不思議な措置をとった。「間違いは誰にでもある。今日から官軍になればいいじゃないか」と言つて、敵だった男たちに政府軍の武器を持たせ、自軍の兵として扱ったのだ。彼らは全員、反乱を起こすことなく顕義のために働いたということだ。これは顕義の人柄で、倒幕前の諸隊で兵が集団脱走したときも、リーダー格の処刑を予想する周囲を尻目に、誰一人処罰せずに戻している。

「温情にして圭角なく、また上下の別なく、部下に対する、友人と相對する如く、一度信じたる人は終生愛顧する風あり」と言われた顕義は、元來が甘い男だから次のような逸話も残している。雨の降る日になるとある哨兵が疲労激しく居眠りをしてしまった。哨兵が仕事を怠れば味方の兵の命に関わる。見つければ場合によっては処刑だが、哨兵が目を覚ますと自分の肩に外套が被せられ、よくよく見れば旅団長の顕義が代わりに雨に打たれながら見張りに立っつけてくれたというのだ。

これだけ甘ければ軍が引き締まらないかといえはそうでもなく、西南戦争では顕義の旅団だけが兵士に

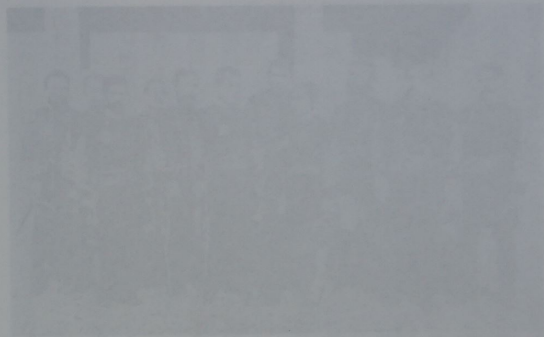
第五章 法治国家への歩み

■明治十四年の政変

顕義の西南戦争の活躍を誰よりも喜んでくれたのは、郷里の大先輩木戸孝允だった。だが、東京に凱旋してきた顕義は、報告すれば手放して喜んでくれたはずの孝允に、会うことはできなかった。顕義が九州の大地を飛び回っているころ、孝允は病に倒れて帰らぬ人となってしまったからだ。その衝撃も覚めやらぬ明治十一年（一八七八）年、今度は大久保利通が暗殺された。明治政府は薩長両巨頭を失ったのだ。

西南戦争の終結で内乱の時代が終わりを告げ、今度こそいよいよ憲法に本腰を入れて取り組めると思った矢先の凶事に、政府の者たちはどれほど途方にくれたことか。なんととっても憲法制定に向けて陣頭で取り組んでいた二人の人物を相次いで失ったのだ。ただひとつ不幸中の幸いだったことは、この仲の悪かった二人の指導者の両方から可愛がられ、両者の憲法論どちらをも聞いていた稀有の人物が存在したことだ。伊藤博文である。

顕義は博文を補佐し、憲法制定と法典の編纂に助力していくことを誓った。



明治十四年の政変、伊藤博文の憲法論、大久保利通の暗殺、木戸孝允の病没、西南戦争の終結、内乱の時代、憲法制定、法典の編纂、伊藤博文の補佐、憲法制定と法典の編纂に助力していくことを誓った。



山田頭義肖像

務卿を辞し、ようやく古巣である司法省に、今度は司法卿として戻ってこることができた。

ところでこのころ、日本は一つの節目を迎えた。孝允、利通に並ぶ、もう一人の維新の巨頭、公卿の岩倉具視が死んだのだ。これで誰に遠慮することなく、公卿の支配が強い太政官制を廃止することができる。近代的内閣制の始まりである。こうして明治十八年、伊藤博文を初代内閣総理大臣とした第一次伊藤内閣が発足したのだ。頭義は初代司法大臣に任命され、司法組織の確立に精力を注ぐと共に商法と民法の編纂に着手し、悲願の条約改正に向けて奮闘していくことになる。頭義の人生の中でもっとも敬しい闘いが始まろうとしていた。

■憲法公布と法典の編纂

日本に戻った博文が憲法草案を完成させたのは、明治二十一年、黒田清隆（一八四〇—一九〇〇）内閣のときであった。政府は速やかに諮詢機関枢密院を設けて審議を重ね、七

このため、明治十二年にはいったん司法省を出て工部卿に就任した。これは伊藤を政治の上で援護できる立場、つまりは参議になるための移籍だ。当時、閣議へ参加して発言するためには参議にならなければならぬが、これは大輔の地位では無理で、卿にならなければならなかった。

明治政府に再び突風が吹いたのは、明治十四（一八八一）年のことだ。佐賀の大隈重信（一八三八—一九二二）が突然イギリス式憲法草案を政府に提出したことでそれは始まった。重信の憲法草案は民権派福沢諭吉（一八三四—一九〇二）の門弟たちが関与して作成したものだと言われているが、彼らはイギリス式議院内閣制を提唱したのだ。この憲法草案には、二年先の十六年には国会を開設すべきであるという急進論が添えられていた。結局重信は敗れて下野したが、時を同じくして激化した自由民権運動に突き上げられる形で政府は国会開設の期限を、明治二十三（一八九〇）年と約束させられてしまった。

調子付くこれらの反政府運動と闘うために、頭義は内務卿に就任した。ときに弾圧を辞さない覚悟だ。己が矢面に立つことで民権派の目と非難を自分に引きつけておこうとしたのである。憲法作成の仕事を担う博文に、決して矛先を向けさせてはならないからだ。

こうして頭義が民権派と闘い、かの山縣有朋が博文の仕事を引き継いで参事院議長として国内整備に当たっているうちに、当の博文はドイツやオーストリアに渡り、誰の邪魔も受けずにみっちりとプロイセン式憲法を学ぶことができた。博文に目処がついたのが明治十六年の暮れ、頭義はもっとも厳しい時期の内

十六条中、実に四十八条に修正が加えられた。顕義は多くの修正案を提案し、採用された。こうして出来上がった七章七十六条からなる欽定憲法は、明治二十二年（一八八九）年二月に二大セレモニと共に公布され、条約改正へ向けて日本は一步前進したかに見えた。だが、出来立ての憲法を引っさげて、大隈重信外務大臣主導の下、新条約締結の交渉を諸外国と始めた政府に世間が出した答えは厳しかった。新条約の中に治外法権に関わる箇所で見られたため、国民は「諾」としなかったのだ。新条約を不服と感じた者たちによって条約改正の延期論が盛んになる一方で、交渉に当たった大隈重信は反対派に爆弾で襲われ、重傷を負ってしまう。結局、黒田内閣は条約改正の交渉を打ち切り、清隆の辞職で幕を引いた。

では、顕義の編纂した民法と商法はどういう経緯を辿ったのだろうか。この二つは明治二十三年の国会開設前に作っておかなければならないものだった。それというのも国会が開かれた後に作ると、一々議会に可否をかなければならなくなるが、そんなことをしていれば、何年たっても埒があかない。だからその前に作ってしまえというのが、法典断行派の考えだったのだ。しかし、顕義が実際に編纂に取り組んだのは明治二十年も十月になってからである。

実は民法の編纂は明治四年にすでに江藤新平によって手を着けられていた。これが佐賀の乱で頓挫し、新平のあとに司法卿を継いだ大木喬任が引き継いで筆作麟祥（一八四六—一九七）に任せたが不出来、明治十三年からは喬任自ら指揮をとって取り組んだが、六年後に内閣に差し出されたものはやはり使える域には達していなかった。そこで一からやり直すことになったこの難業を外務大臣の井上馨がいったんは引き継いだものの、顕義にしかできぬだろうと判断した伊藤博文の強い希望で司法省にまわってきたのである。顕義に許された編纂期間は、わずかに二年であった。いったい、この十数年間に四人の知識人の手を隔てて成らなかつた民法編纂が、わずか二年でできるものなのかどうか。が、一見不可能に思われることをやっつけてのけるのが顕義なのだ。

法律取調委員長に任命された顕義は、商法をドイツのロエスレル、民法をフランスのポアソナードに起草させ、上がってくる条項の草案を日に何十、何百と、これは日本人のみで構成された委員によって会議にかけていった。草案の審議の基準は、日本の国情にあっているかないに絞られ、各々の学説等の絡む議論は一切、禁じた。それでもこれだけの量だから、夜の十時、十一時に及ぶこともしばしばで、顕義は寢食を忘れてほとんどの会議に出席した。

雪のどか降りの日に、さすがにこんな日は誰も来ないだろうと思いつつも委員の一人が来てみると、顕義だけがすでに着座していて、いつものように「やりましょう」と言っただけというエピソードも残っている。

こういう生活を二年ほども続け、どうにか国会開設前にその両方を創り上げ、公布することに成功したが、無理を続けた顕義の身体はボロボロになっていた。それでも一大事業を成し遂げた後の心は晴れやかであつたはずだ。

ところが、顕義を奈落の底に突き落とす逆転劇が起こるのである。いったん公布された商法に対して施行を目前に、ケチが付いたのだ。

■法典論争と噴出した薩長閥への不満

顕義もあまりに懸命に取り組みすぎて周囲が見えなくなっていたところがある。初め顕義が編纂に取り組み出したとき、条約改正のために、なにより急いで創り上げなければならぬというのが大前提であった。急ぐためには平時なら通さぬ無茶も、こり押しせねばならぬこともある。

顕義のした無茶は幾つかあった。まずは取調委員のメンバーを、自分の意を汲む人物で固めてしまったことに問題がある。人選に大きく偏りが見られたため、除外された学閥に恨みを残し誤解を生んだ。これはフランス式民法を採用したためにフランス系学閥の人間を集めた結果である。顕義がフランス式を採用したのは明治四年に編纂事業をスタートさせた江藤新平以来の方針を引き継いだからで、これまでどの後任者もそうしてきたことであったが、イギリス式の学者から激しい反感を買ってしまった。最初に顕義の法典に異議を唱えたのは、このイギリス式学閥『法学士会』（東京大学法学部卒業生によって組織）の面々である。

第二の無茶は、立法院である元老院に、仕上がった法典の草案を通すとき、通常の手続きをはしょって

しまったことだ。時間短縮を図って条項の議定を禁止、編章ごとの一括審議をさせたのだ。これは顕義が閣議にかけて特例を認めさせたためにできたことだ。時は山縣有朋内閣に移っていたが、総理有朋の名で奉勅を盾に元老院を抑え込んだのである。元老院側には不満ばかりが残った。ここで潜在的敵を作ってしまったことが、後々逆襲される隙となった。

顕義にしてみれば、いずれも条約改正のために止むを得ない処置であった。しかし、世間は納得しなかった。事情が途中から大きく変わってしまったからだ。

それこそ法典の完成を目前にした明治二十二年十月、外相大隈重信の遭難で条約改正は延期の方針に方向転換したではないか。顕義が身体を壊してまで急がされた法典編纂の事業は、最後の最後で急ぐ必要のないものへと変わってしまったのである。しかし、顕義の思考は今さら方向転換しなかった。なにより彼は条約改正を諦めてはいなかった。明治二十二年十二月に発足した山縣内閣の真意も、この段階では諦めていなかった。交渉を断念したのは前内閣で現内閣ではないという政府首脳部と、条約改正は延期されたのだと認識している世論の温度差が、顕義の足を掬うのだ。

商法の施行は明治二十四年、民法は二十六年からと定められ、いったんは正式に公布された。だが、開院された帝国議会で衆議院に商法の延期法案が提出され、これが議題に上って激しい法典論争へと展開していく。延期派は、商法の施行を民法と同じく明治二十六年へと先延ばしするよう要求してきたのであるが、元々が学閥の齟齬から発した問題であるだけに、後々には商法と民法を一括して閣に葬るための布石

であることは容易に想像できた。
 内容の不備が槍玉に挙げられての論争なら顕義も納得できたであろうが、派閥抗争に巻き込まれたというのが真実であるだけに、そんなことで潰されてはたまらなかつたであろう。しかも、いったん衆議院に上がると、単なる学閥の抗争に留まらず、御一新以来今日まで二十三年間続いた薩長による藩閥政治への憤懣が一気に顕義の法典叩きに姿を変えて爆発した様相だ。結果は大差で延期法案が衆議院を通過してしまふのだ。

顕義はこの波を勅裁によつて食い止めようと貴族院に議案が上る前に閣議にかけたが、首相有朋は首を縦には振らなかつた。顕義と有朋は陸軍省を巡つてもめた仲だが、木戸孝允の死後は同郷の政友として常に協力体制で歩んできた。有朋を首相に推したのも顕義である。が、有朋は、苦境に陥つた顕義の援護をしなかつた。顕義にしてみれば最後の砦が崩れたような心持だつたに違いない。彼は、失意の中で辞表を出し、発熱を理由に内閣を去つた。事実、四十度近い熱を押し、気力だけで出仕していたのだ。

心情を汲めば、有朋は顕義を援けるべきだつた。条約改正の悲願に向かつて、実に三十数年間の長きを顕義は一心に闘つてきたのである。ことにこの二年は寢食を忘れて打ち込んだ。しかし、顕義の歩んできた苦節の道に目を瞑り、私情を挟まなかつた有朋の態度は、政治家としては正しかつたといえるだろう。どれだけ苦労したかなどは一個人の問題で国家を前には無に等しい。勅裁を仰ぐことは、議会政治に踏み出した日本の軌道から外れている。

顕義もそのことにはすぐに気付いた。彼は己の辞表が誤つていたことを認めて撤回したが、有朋は真夜中の一時を過ぎるまでこの日の閣議を解散させずに、邸宅に戻つてしまつた顕義の撤回をじつと待つていたのである。

こうして顕義は高熱の無理を押し、貴族院で正式に採決が出るまでを再び議会の中で闘わなければならなくなつた。その結果、予想通りに敗北したのだ。終わつたときには立てないほど身体が病んでいたため、これ以上の職務の遂行は無理として、再び辞表を提出した。有朋が顕義の辞表を手元に留めたため、現職のまま療養生活に入ったが、インフルエンザから肺患を併発し、血を吐くこともあつたらしい。有朋は日に四度も見舞いを差し向け、顕義の病状を気遣つた。

■謎に包まれた死

体調も一時期快復し、顕義は山縣内閣に続く松方正義まつかたのただよ(一八三五一—一九二四)内閣でも司法大臣として留任したが、内閣成立と同時に起こつた大津事件を機に職を退き、長い療養生活に入った。

顕義退官後、再び法典論争は、今度は民法延期法案に絡んで起こり、こちらも延期派の勝利に終わった。自分の民法が幻となつた知らせを受けた顕義は、「後世の評を待つのみ」と言つて、後はただ沈黙した。では、その中身への評価はどうであつたのだろう。後世の評を待つまでもなく、各国の法学者から高い



山田顕義墓所（東京都文京区護国寺）

だからだろうか、志半ばに斃れた親友であり又従兄でもある河上弥市の殉難地生野を訪ねてみる気になったようだ。そして、友の魂に祈りを捧げた帰り、同じ生野にある銀山を視察中ふいに倒れ、顕義は帰らぬ人となってしまった。明治二十五年（一八九二）年十一月十一日。享年四十八歳。

当時は病死と報じられたが、実際は立杭に転落しての事故死だった、と立ち会った医師がずっと後に告白している。

ところが、昭和六十三年、日本大学によってなされた「学祖山田顕義伯爵の墓石発掘および調査」によって大変な事実がわかった。顕義の頭蓋骨に、刃物でついたと思われる穿孔性の五角形の骨折痕が見つかったのだ。

この傷が、人為的な干渉によってなされたものか、転倒した場所にたまたま刃物のようなものが落ちていたためついたのかは、今となってはわからない。検証する術がないから、真実はいまだベールの中にある。

参考史料の多くを日本大学編集の書によりました。ここに御礼申し上げます。



生野銀山跡の顕義終焉之地の碑（兵庫県朝来市）

支持を得、これなら条約改正に差し支えなしとの決議が国際公法会総会で下っている。国内でも、そもそも民法延期派のリーダー格江木衷（二八五八一—一九二五）でさえ、さんざん潰しておきながら、「内容は、その後、新たに作られた民法よりすばらしい」と評しているのだから、顕義が聞けば苦笑しか出なかったはずだ。

また、なにより現在の法律の中にその精神が引き継がれ、我々の生活にも息づいていることから、成否はあきらめかと言えないのではないだろうか。

顕義の死は突然、訪れた。晩年の顕義は、往時を追懐することが多く、かつて共に闘った高杉晋作や久坂玄瑞らを思い起こしつつ、「辛酸艱苦、同盟先輩の士、多くは死をもって国に殉じ、維新成業の基、実にここに胚胎す。その言語動止、恍然として心目の間にあり、今昔の感にたえざるなり」と書き記したのも最後の年のことである。

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

シリーズ「萩ものがたり」⑪のご案内

萩の史碑

一坂 太郎



萩は幕末から明治にかけての日本の近代化をリードした人物を、さら星のごとく輩出した町である。彼らの誕生地や旧宅跡の多くにはいま碑がある。また幕末の動乱と共に発達した産業史跡にも碑がある。こうした大正の終りから昭和のはじめにかけて設置された史碑を、はじめて集大成し、解説を加えた。町かどに立つ碑前に佇み、幕末史に想いをはせるためのガイドにも最適。

A5版 54頁 定価500円(税込)
お申し込みは直接、下記「萩ものがたり」まで

- 既刊 ①萩の椿 吉松 茂 600円 ②高杉晋作100問100答 一坂太郎 500円
③萩開府 北村知紀 600円 ④萩まじじゅう博物館 西山徳明 600円
⑤松陰先生のことば 萩市立明倫小学校監修 500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って 富地ゆう 600円
⑦萩と日露戦争 一坂太郎 500円 ⑧萩の巨樹・古木 草野隆司 600円
⑨吉田松陰と現代 加藤 周一 600円 ⑩萩沖の魚たち 中澤さかな、堀 茂夫 600円
⑪萩の史碑 一坂 太郎 500円 ⑫山田顕義 秋山 香乃 600円

第7回(平成19年4月)発行予定

- ⑬井上剣花坊 井上剣花坊顕彰会監修 ⑭高島北海 高樹のぶ子

TRC102095

ものがたりは、定期購読ができます。

にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

り、確実にお手元に、送料は無料！
ガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。
電話・インターネットでの申込みもお受けします。
申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。
銀行からの口座引き落としもできます。

有限責任 萩ものがたり
中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地
TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458
<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html>
E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

落丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいふべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承することにも、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるようお願い申し上げます。



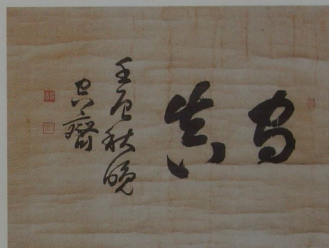
《著者紹介》
秋山 香乃
あしかの かの

昭和四十二年福岡生まれ。作家。「歳三往きてまた」でデビュー。他、山田顕義を描いた「五稜郭を落した男」、会津の山川浩を描いた「獅子の棲む国」(総司炎の如く)、「茶々と信長」、「茶々と秀吉」、「漢方医・有安」(忘れ形見)、「新撰組捕物帖」源さんの事件簿」などがある。

Y289
ヤマ

定価 600円 (本体571円+消費税29円)

秋に生まれ、吉田松陰に学んだ山田顕義（日本大学学祖）。神の如き軍人から、法典伯へと転身した巨人の知られざる苦悩の生涯を描く。



秋市立秋図書館



110708468

89

秋

のがたり

Vol 12

山田 顕義

2006年10月1日 第1期発行

著者 秋山香乃

発行者 野村興児

発行所 有限責任中間法人 秋ものがたり

印刷 有限会社マシヤマ印刷